

## 素材敬語の対者敬語化の検証

### —高校生と大学生に対するアンケート調査をもとに—

中川 勇也

#### 要旨

本稿では、高校生、大学生を対象に調査を実施し、その結果から、素材敬語の対者敬語化の傾向を実際に確認することができた。一方で、そのみでは十分な説明ができない結果も得られたため、従来の敬語の適用のルールや近年の若者の敬語意識をもとに、素材敬語の対者敬語化に関する理論を補足する仮説を導き、その妥当性を検討した。

**キーワード**：対者敬語，素材敬語，親疎，内・外の関係，関係の連続性

#### 1. はじめに

現代の敬語の使用実態については旧来の敬語行動と比較してさまざまな変化が指摘されているが、特に近年その傾向が指摘されてきているのが『素材敬語の対者敬語化』である。敬語の分類に対者敬語と素材敬語に分ける考え方<sup>1</sup>がある。これらは本来、その敬意の向かう対象が異なるもの<sup>2</sup>であり、その発言のシチュエーションごとにそれぞれの使用の有無を判断する必要がある。しかし、近年の研究では、対者敬語と素材敬語の垣根が低くなってきており、両者が一体となって話し手の表現意図を実現する傾向にあることが指摘されている。加えて、そうした傾向は話題の人物への敬意をあらわすことの重要度が低下してきていることの表れとも考えられるため、そもそも素材敬語自体の使用が減少している可能性や親しい者同士の会話において素材敬語がまったく使われなくなっている可能性も否定できない。そうした検証を含め、話し手・聞き手・話題の人物をさまざまに設定し、その中で高校生・大学生の敬語行動がどのように変化するのか、その傾向、およびその背景について考察する。

#### 2. 調査の概要

本稿においては次のような内容でアンケート調査を実施した。

##### 2.1. 被験者

被験者の概要は次のとおりである(表 1)。

---

<sup>1</sup> 素材敬語と対者敬語の定義については南(1987)のものを用いる。すなわち、  
素材敬語—尊敬語・謙譲語・美化語がこれにあたる  
対者敬語—ていねい語がこれにあたる

<sup>2</sup> 敬意の向かう対象はそれぞれ、  
素材敬語—話題の人物に対する敬意を表す  
対者敬語—聞き手に対する敬意を表す  
であり、発話のシチュエーションに応じてそれぞれの使用の有無は独立に判断される。

調査はそれぞれ、高校生については新潟県立新発田高等学校において2010年9月に実施、大学生については名古屋大学と広島市立大学において2010年6月に実施した。

表1 被験者概要

グループ	所属	実施数(人)
高校生	新潟県立新発田高等学校	158
大学生	名古屋大学	106
	広島市立大学	20

## 2.2. 調査文

調査文作成における動詞の選定は、日常生活において多用され、被験者になじみ深いものであることを基準とした。選択肢については素材敬語と対者敬語の使用実態を調べるために、動詞部分に関しては、動詞の原型・素材敬語・およびその中間の敬意にあたるものとして尊敬の助動詞「れる」を用いたもの<sup>3</sup>を用意し、対者敬語の有無との組み合わせにより回答するものとした。また、問題文については会話中の登場する人物の呼称を各被験者により身近なものにし、回答箇所以外の会話文については選択肢のいずれを回答した場合にも文全体として違和感がないよう配慮した(これは所与の会話文が特定の選択肢にとくに親和性が高くなり、結果としてある選択肢に回答を誘導してしまう可能性がなきよう配慮したものである)。なお、調査文に関しては動詞・聞き手・話題の人物につき、すべての組み合わせのパターンに回答するかたちであるが、ある調査文での回答が他の調査文の回答に与える影響(たとえば、聞き手・話題の人物が同じ場面で動詞が異なる調査文同士で、意識的に同程度の敬意の回答を選ぶという操作がなされる、という影響)がないよう、調査文の順番はランダムで配置し、また、調査文の順番によって回答に予期せぬ影響がある可能性が排除できないため、ランダムの配置を3パターン用意した。

調査文は高校生については20文、大学生については22文を実施した。

以下では紙幅の関係上、回答を次の形式で表記する。つまり、回答を動詞(素材敬語)とそれ以外(対者敬語)に分け、動詞部分[来る・来られる・いらっしゃる]それぞれ[原型・レル・素材)とし、それ以外の部分[～よ・～ましたよ)を[原型・丁寧)と表記し、回答の表記はこれらを組み合わせた形(例：素材・丁寧)を用いる。

## 3. 敬語使用のルール、および最近の使用傾向の概観

調査結果についての考察を行う前に、敬語使用のルール、特に素材敬語の使用の有無に関するルール<sup>4</sup>、およびそれと比較するかたちで最近の敬語使用にみられる傾向についての概観を整理する。

<sup>3</sup> 近年用例が増加しており、「レル敬語」とも呼ばれる。本稿では以下、この呼称を用いる。

<sup>4</sup> 対者敬語については適用のルールが単純であるため、その説明は割愛する。

### 3.1. 敬語の〈適用〉のルール

ルールの基本的な説明に関しては、菊地(1994)に詳しい。『敬語の〈適用〉のルール』は、

- ①.敬語上のⅠ人称の人物を高めてはいけない。
- ②.敬語上のⅢ人称の人物で、聞手から見て高める対象とは思われないような人物を高めるのは、聞手に対して失礼になる。
- ③.聞手から見て同等以下の人でも、話し手がその人を高めることで結果的に聞手のことも立てることになる場合は、その人を高めてよい(②に該当しない)。

の3点である。補足して説明する。①については一般的な感覚から当然のように思われる。

Ⅰ人称、すなわち自身に対する敬語は「自敬表現」と呼ばれ、長い日本語の歴史でも実用例はごく一部に限られる。ただし、ここで留意しなければならない点は、話し手・聞き手・話題の人物の三者間で、話題の人物について話し手・聞き手との親疎を考えた時に、特に話し手に近い人物であると考えられる場合は、話題の人物を高めることができないことである。実生活における例を挙げれば、社外の人との会話で社内の上司が話題の人物である場合、あるいは自分以外の家族宛での電話を受けた場合の対応などである。②・③についてはセットで説明するのだが、これらのルールが敬語の使用を複雑にしている。というのも、本来、素材敬語とは話題の人物への敬意を表現するために使用するものであるから、聞き手如何に関わらず、その使用は妨げられないように思われる。とはいえ、実際にその会話の聞き手への配慮が優先されるため、聞き手が知らない人物に対して素材敬語を使用することは聞き手にとって不快となる可能性があるため、その使用は控えられるべきである、というのが②についての説明である。③はその例外で、聞き手が話題の人物より立場が上である場合など、話題の人物に対して素材敬語を用いて敬意をあらわすことにより、結果として、聞き手をも高める場合には素材敬語を使用してもよい、という説明である。

### 3.2. 『内/外の関係』

①についてさらに補足する。先に例で挙げた同じ社内の人物や家族は、世間一般的に『内の関係』の人物として認識されているが、加えて、聞き手との関係において、相対的に話題の人物が『内の関係』にあるとみなされる場合においてもこのルールの適用がある。菊地(1994)は、従来のⅠ人称・Ⅱ人称はそのままとして、Ⅲ人称を話し手側の領域の人物・聞き手側の領域の人物・どちらか一方の領域とはいえない人物に整理し直し、それぞれを敬語上のⅠ人称・Ⅱ人称・Ⅲ人称とした。このルールに関しては、話題の人物が敬語上のいずれの人称に分類されるかは話し手の主観的判断にゆだねられるために、客観的視点による分析に援用するにはおのずと限界があるが、実際に敬語の使用実態を把握する上では無視できない要素であるといえよう。

以上のルールについては、ある程度規範的なものであり、一般的に許容されているものであるといえよう。一方、以下については近年の研究において新たに指摘された、比較的新しい敬語使用の傾向である。

### 3.3. 素材敬語の対者敬語化

では、具体的に素材敬語の使用法にどのような変化が起こってきているのであろうか。それは、素材敬語が話題の人物への敬意を表す役割から、聞き手への敬意を表す役割も帯びてきている、ということである。言い換えるならば、話題の人物が同じ場合であっても、聞き手が話し手にとってより敬意を表すべき存在であると考えるとき、素材敬語が使用される率が高まるということである。なぜこのような傾向がみられるようになってきているのか、その説明としてはポライトネスの理論<sup>5</sup>によるものが有力であると考えられている。すなわち、現代における敬語は画一・規範的に用いられるべきものではなく、話し手の、聞き手(間接的に話題の人物)への配慮を効果的にあらわすことを目的に使用する方向にシフトしてきている、という説明である。

以上、本章においては素材敬語と対者敬語の使用の有無についての規範的なルールを整理し、加えて現代における素材敬語と対者敬語化の傾向についても概観してきた。次章においては、実施したアンケートを集計し、そのなかから現代における敬語使用の実態の傾向を読み取っていく。

## 4. 調査の結果

### 4.1. 調査の集計結果

まず、高校生を対象とした調査結果を掲げる<sup>6</sup>(表 2)

表 2 高校生一調査集計結果

動詞	聞き手	話題の人物	原型・原型	原型・丁寧	レル・原型	レル・丁寧	素材・原型	素材・丁寧
来る	友人	友人	154	2	0	0	0	1
		先輩	136	3	14	0	4	1
		教師	140	4	9	0	5	0
	先輩	友人	2	154	0	2	0	0
	先輩 2年	先輩 3年	2	121	1	20	1	13
	先輩 3年	先輩 2年	2	131	0	21	0	4
	先輩	教師	2	126	1	14	0	15
	教師	友人	2	154	0	0	1	1
		先輩	0	129	2	21	0	6
教師		2	89	0	39	0	28	
する	友人	友人	153	4	0	0	0	1

<sup>5</sup> ポライトネス理論とは Brown & Levinson(1987)により提唱された理論。人々の言語行動を言語表現の丁寧度に加え、語用論的方法により評価する。

<sup>6</sup> 稀に無回答の箇所があり、一部の項目で総計が被験者数と等しくない箇所が見られるが、調査結果を分析する上での影響は無視できるレベルであるため、以下、本稿を進める上でとくに言及しない。大学生の調査結果についても同様である。

素材敬語の対者敬語化の検証

		先輩	138	6	12	1	1	0
		教師	139	5	9	0	5	0
	先輩	友人	3	154	1	0	0	0
	先輩 2年	先輩 3年	3	131	1	19	0	5
	先輩 3年	先輩 2年	3	131	0	22	0	2
	先輩	教師	5	126	1	18	0	8
	教師	友人	3	154	0	1	0	0
		先輩	1	130	0	26	0	1
		教師	0	96	0	49	0	13

次に、大学生を対象とした調査結果を掲げる(表 3)

表 3 大学生一調査集計結果

動詞	聞き手	話題の人物	原型・原型	原型・丁寧	レル・原型	レル・丁寧	素材・原型	素材・丁寧
来る	友人	友人	124	2	0	0	0	0
		先輩	81	8	25	3	6	2
		教授	74	7	16	6	19	4
	先輩	友人	1	123	0	2	0	0
	先輩	OB/OG	1	57	0	37	2	29
	OB/OG	先輩	0	76	0	40	0	10
	先輩	教授	0	50	0	32	1	43
	教授	友人	0	124	0	2	0	0
		先輩	0	83	0	38	0	5
	教授下	教授上	1	10	0	33	0	81
教授上	教授下	1	20	0	48	0	57	
する	友人	友人	120	5	0	0	0	0
		先輩	94	6	21	4	1	0
		教授	80	4	25	6	11	0
	先輩	友人	0	125	0	1	0	0
	先輩	OB/OG	1	63	0	53	0	7
	OB/OG	先輩	1	81	0	42	0	2
	先輩	教授	0	58	1	53	1	13
	教授	友人	1	125	0	0	0	0
		先輩	0	89	0	34	1	2
	教授下	教授上	0	15	0	81	0	30
	教授上	教授下	0	19	0	92	0	15

## 5. 結果に関する考察

本節ではそれぞれ、調査結果から注目すべき個所を再掲し、考察する<sup>7</sup>。

### 5.1. 素材敬語の対者敬語化

本稿の調査結果のうち、素材敬語が使用される可能性が比較的高いと考えられる場面、つまり話題の人物が「先輩」、「教師・教授」のときに素材敬語を使用している回答率を、話題の人物は同じで聞き手が変化した場合の素材敬語の使用率の変化をみるため並べ替える(表4)

表4 素材敬語の対者敬語化の検証

被験者	話題の人物	聞き手	レル敬語使用率(%)		特殊型使用率(%)		レル敬語と特殊型使用率の合計(%)	
			来る	する	来る	する	来る	する
高校生	先輩	友人	8.9	8.2	3.2	0.6	12.1	8.8
	先輩3年	先輩2年	13.3	12.7	8.9	3.2	22.2	15.9
	先輩2年	先輩3年	13.3	13.9	2.5	1.3	15.8	15.2
	先輩	教師	14.6	16.5	3.8	0.6	18.4	17.1
	教師	友人	5.7	5.7	3.2	3.2	8.9	8.9
	教師	先輩	9.5	12.0	9.5	5.1	19.0	17.1
	教師	教師	24.7	31.0	17.7	8.2	42.4	39.2
大学生	先輩	友人	22.2	19.8	6.3	0.8	28.5	20.6
	OB/OG	先輩	29.4	42.1	24.6	5.5	54.0	47.6
	先輩	OB/OG	31.7	33.3	7.9	1.6	39.6	34.9
	先輩	教授	30.2	27.0	4.0	2.4	34.2	29.4
	教授	友人	17.5	24.6	18.3	8.7	35.8	33.3
	教授	先輩	25.4	42.9	35.0	11.1	60.4	54.0
	教授上	教授下	26.2	64.3	64.3	23.8	90.5	88.1
	教授下	教授上	38.1	73.0	45.2	12.0	83.3	85.0

話題の人物が同じとき、聞き手が「友人」の場合とくらべ、それ以外の場合の素材敬語の使用率が増加している点を確認できる。素材敬語が単に話題の人物への敬意を表すとすれば、その使用率は聞き手によらず一定であるはずである。すなわち、聞き手によって素材敬語の使用率が変化しており、素材敬語の対者敬語化の一例とみることができよう。

### 5.2. 素材敬語の対者敬語化の例外

前節において素材敬語の対者敬語化の傾向が本調査においても確認できたことを指摘した。とはいえ、調査結果に全く疑問が残らないかというところではない。さらに分析を要する事項がある。

<sup>7</sup> なお、以後の記述では混乱を避けるため、「いらっしゃる」・「なさる」を「特殊型」と呼び、素材敬語を「レル敬語」と「特殊型」の2つに分け分析を進める。

前掲表 4 のうち、聞き手が「先輩」・「教師(教授)」, 話題の人物が「先輩」の場合のみを抜き出したものが以下に掲げる(表 5)。

表 5 聞き手が「先輩(OB/OG)」のときの素材敬語の使用率

被験者	話題の人物	聞き手	レル敬語使用率(%)		特殊型使用率(%)		レル敬語と特殊型使用率の合計(%)	
			来る	する	来る	する	来る	する
高校生	先輩 3 年	先輩 2 年	13.3	12.7	8.9	3.2	<u>22.2</u>	<u>15.9</u>
	先輩 2 年	先輩 3 年	13.3	13.9	2.5	1.3	15.8	15.2
	先輩	教師	14.6	16.5	3.8	0.6	<u>18.4</u>	<u>17.1</u>
大学生	OB/OG	先輩	29.4	42.1	24.6	5.5	<u>54.0</u>	<u>47.6</u>
	先輩	OB/OG	31.7	33.3	7.9	1.6	39.6	34.9
	先輩	教授	30.2	27.0	4.0	2.4	<u>34.2</u>	<u>29.4</u>

注目すべきは大学生の調査結果である。聞き手が「教授」、話題の人物が「先輩」のときのレル敬語と素材敬語使用率の合計は、動詞「来る」のときは 34.2%、動詞「する」では 29.4%だが、これは聞き手が「先輩」・「OB/OG」のときとくらべ、いずれに比べても低い値となっている(高校生の調査結果では、聞き手が「教師」のときが他の場合とくらべ、高いか、もしくは同程度の値を示している)。素材敬語が対者敬語として扱われる要因として、話し手に対して疎の関係にある聞き手に対する敬意を表すとともに、話し手が自身の品格の保持を目的としていることを挙げた。それならば、聞き手が「教授」のときに素材敬語の使用率が高くなるように思われるが、調査結果はそうはなっていない。このことから、素材敬語の対者敬語化につき、さらに補足すべきルールが導かれるように思われる。

### 5.3. 「OB/OG」についての考察

本調査を分析する上で、被験者が大学生の場合の「OB/OG」について、その意味合いを重視することは分析を進めるうえで有益であるようにおもわれる。なぜなら素材敬語の使用率について、聞き手が「OB/OG」のときの値(来る 39.6%、する 34.9%)が、聞き手が「先輩」(来る 54.0%、する 47.6%)のときの値と「教授」(来る 34.2%、する 29.4%)のときの値のあいだに位置するからである。ゆえに、以下の考察をすすめていくうえで、聞き手が「先輩」のときと「教授」のときにおいて、そのときの素材敬語の使用率が変化する要因について検討し、その説明が、聞き手が「OB/OG」のときにも適用できるかを検証する形式をとることとする。

### 5.4. 『内/外の関係』からの説明の試み

まず、聞き手が「教授」で話題の人物が「先輩」のときについて考える。このとき、話題の人物である「先輩」が、話し手と聞き手「教授」との関係において『話し手側の領域の人物』であると考えられることに異論はないように思われる。ゆえに、『外の関係』である「教授」に対して、『内/外の関係』である「先輩」について話すときに素材敬語を用いることは適当ではない、と説明できるため、聞き手「教授」・話題の人物「先輩」のときの素材

敬語の使用率が他の場合に比べて低くなっていることの根拠としては妥当であろう。

よって、つぎに、聞き手が「先輩」、話題の人物が「OB/OG」のとき(あるいはその逆)の場合において、この説明により素材敬語の使用率の変化が説明できるのかを検証する必要がある。では、話し手・「先輩」・「OB/OG」の三者の関係で考えた場合、「先輩」・「OB/OG」を『話し手側の領域の人物』・『聞き手側の領域の人物』のいずれに分類するのが妥当であろうか。まず言えることは、「先輩」は話し手と同じ現役の大学生を想定しており、一方「OB/OG」はすでに卒業している人物を想定しているので、話し手にとって「先輩」よりも「OB/OG」のほうが近い関係にあるとは考えられない。ゆえに三者の関係は下のいずれかになると考えられる(表 6)。

表 6 想定可能な三者の関係

	先輩	OB/OG
パターンⅠ	ウチ	ウチ
パターンⅡ	ウチ	ソト
パターンⅢ	ソト	ソト

三者間の関係をいずれのものであると考えるかは話し手の主観によるものであり、また、調査に回答するにあたり、個々人が具体的にどのような関係にある人物を想定したかは特定し得ないため、これ以上の絞り込みは不可能であるし、無意味である。では、実際に上記のパターンに沿って聞き手・話題の人物を想定した場合、それぞれの場合における素材敬語の使用の可否についてはどうであろうか。下記のようにまとめられる(表 7)。

表 7 三者間の関係と素材敬語の使用の可否

	聞き手	話題の人物	素材敬語 使用の可否	聞き手	話題の人物	素材敬語 使用の可否
	先輩	OB/OG		OB/OG	先輩	
パターンⅠ	ウチ	ウチ	○	ウチ	ウチ	○
パターンⅡ	ウチ	ソト	○(△)	ソト	ウチ	×
パターンⅢ	ソト	ソト	○	ソト	ソト	○

指摘すべき点はパターンⅡのときである。聞き手が「OB/OG」、話題の人物が「先輩」のときについては、先の聞き手が「教授」、話題の人物が「先輩」のときと同様の理由により、素材敬語を用いることが妥当とはいえない。逆に聞き手が「先輩」、話題の人物が「OB/OG」のときについては、ほとんどの局面において素材敬語の使用は問題ないように思われる(ちなみに、パターンⅡの聞き手が先輩、話題の人物がOB/OGの場合であるが、一般にウチの関係の聞き手に対して、ソトの関係にある話題の人物への素材敬語を用いることは必ずしも妥当とはいえない。しかし、本調査の場合においては、聞き手である先輩が話題の人物であるOB/OGを知っている可能性が高いと想定できるので、その限りでは素材敬語を用いるのが妥当であるので、使用の可否の評価は○(△)とした)。

被験者がいずれのパターンを想定し、回答したかは感知しえないと述べたが、仮に被験

者が 3 パターンに均等に分かれたとすると、パターンⅡの被験者数の分だけ聞き手が「OB/OG」、話題の人物が「先輩」のときの素材敬語の使用率が低下するはずなので、表 4 における素材敬語の使用率の差の要因をある程度説明できるように思われる<sup>8</sup>。

以上では、『内/外の関係』の概念から、素材敬語の使用率の変化について説明を試みた。理論としてはある程度妥当であろうが、説明として充分かは疑問が残ろう。

### 5.5. 敬語の〈適用〉のルール②・③からの説明の試み

前節の説明はルール①によるものであった。今度はルール②・③による説明を試みる。

ちなみに、ルール③の『話し手がその人を高めることで結果的に聞手のことも立てることになる場合』とはどういう状況であろうか。菊地(1994)は次のように説明する。

聞手と同じタテ社会に属する、聞手以下の人物を高める(学生や学外の人が教授と話す場合に、助教授を高める)などの場合である。

すなわち、聞き手と話題の人物が同じ組織・団体に所属していると考えられる場合であろう。以後、本稿ではこの関係性につき「関係性に連続性を有する」という記述を用いる。

具体的な考察に移る。まず、話し手と聞き手「教授」、話題の人物「先輩」の場合を考える。この場合、「先輩」を高めることが結果として「教授」を高めることにはならない(=関係性に連続性を有するとはいえない)ので、素材敬語の使用率が低くなる。こちらの説明も根拠としては妥当であるように思われる。

では、そのほかの場合においてはどうかであろうか。一般に「先輩」と「OB/OG」は関係性に連続性を有すると考えられ、「先輩」にとっても「OB/OG」も高める対象であると考えられるので、いずれが聞き手でいずれが話題の人物であっても、話し手が素材敬語を使用することに問題はないように思われる。一方で、調査結果においては、いずれが聞き手であるかによって素材敬語の使用にかなりの差がみられる。このことに関して有力な説明はなしえるであろうか。

考えうる仮説としては、話し手が「OB/OG」との関係に連続性を有しているとは認識していない、というものである。調査文において「OB/OG」は、すでに卒業し、現在は学外の人物を想定するよう指定してあるため、この点に関係の断絶を認めることは(やや乱暴ではあるが)一応、可能である。とはいえ、この説明が妥当であるかについてはかなり疑問が残るし、そもそもこの説明自体が、さきに述べた『内/外の関係』における、「先輩」を『内の関係』、「OB/OG」を『外の関係』と考えた場合の説明とほぼ同じものであり、先の説明の方が論拠としては強いと考えられるため、本節の説明の試みは大きな意味はなせず、『内/外の関係』による説明を補強する程度の意味合いしか持たない。

### 5.6. 若者の敬語意識からの説明の試み

以上、さまざまに説明を試み、『内/外の関係』に基づく説明が有力であることを述べたが、

<sup>8</sup> 被験者が仮に 3 パターンに均等に分かれた場合、表 4 に見られるほど顕著に素材敬語の使用率の差は認められないはずであるが、話し手・「先輩」・「OB/OG」の三者間の関係について、私見ではパターンⅡを想定する場合が多数を占めるように思われるので、表 4 程度の使用率の差は十分想定できると考える。

とはいえ大学生の敬語行動において、そういったルールを意識して敬語を使うことが日常生活においては希少であると考えられ、はたして『内/外の関係』に(たとえ無意識によってであるにしろ)依拠して素材敬語の使用の有無を操作しているかという点、なお疑問が残る。よって、別の角度からの説明を試みることにする。

近年の若者の敬語行動を扱った研究では、敬語の使用において社会階層や上下関係よりも使用する社会的な人間関係を重視し、敬語はあくまで社交場の関係性を維持するためのひとつのツールである、と考える傾向にある。それは、敬語が聞き手、あるいは話題の人物への敬意を表現する「目的」として使用されるのではなく、相手との関係性を規定するための「手段」として用いられてきていることにほかならない。つまり、聞き手・話題の人物が誰かによる敬語の使用・不使用を固定的・規範的に考えるのではなく、その状況ごとに、より柔軟に運用していこうというスタイルであると言える。このような敬語意識の変化傾向は、先の素材敬語の使い分けについての説明を提供する上で有益であるように思われる。

先の考察に戻ろう。「先輩」が「教授」との関係で相対的に『話し手側の領域の人物』であることは述べたが、絶対的にも同じコミュニティに属する、日常的に密接な関係にあるといえる。加えて、「話し手」・「先輩」・「OB/OG」は同じコミュニティに属する「学生」であるという点で関係性に連続性を有する。それは「話し手」・「教授」間の関係とは対照的である。つまり、関係性に連続性を有する関係において、より敬意の高い表現を用いることによってそのコミュニティへの帰順意識を表現し、社交上の人間関係を維持・改善することでコミュニティ内での安定した立場を確保する狙いがある、という説明である。

以上、素材敬語の使い分けの背景の説明を、3通りの論拠のもとに説明を試みてきたが、どれも論拠としては不十分であり、今回の調査で見られた、素材敬語の対者敬語化の傾向に逆行する素材敬語の使用の差を明確に説明することはかなわなかった。しかし、そもそも使い分けが明確なものではなく、あくまで傾向にとどまるものであり、また、そうした傾向とは逆の回答も散見された。ゆえに、こうした傾向の背景についてもさまざまな要因が複雑に作用していると考えるのが妥当であるように思う。

本稿においては、そもそもアンケートの趣旨が、こうした傾向の要因を明らかにするためのものではなかったため、明確な論拠をしめすことができず、考えうる論拠を列挙するにとどまってしまった。しかし、現代における敬語文化を探るうえで非常に興味深い問題であるように思われるので、今後の研究課題としたい。

## 参考文献

- 秋元祐哉(2005) 「現代日本語における待遇表現の研究—素材敬語の対者敬語化について—」  
『埼玉大学国語教育論叢 第八号』埼玉国語教育学会
- 菊地康人(1994) 『敬語』角川書店
- 中川勇也(2012) 「現代における敬語使用の実態とその背景の考察」2011年度一橋大学卒業論文

南不二男(1987) 『敬語』 岩波書店

Brown, P. & S. Levinson(1987) *Politeness: Some Universal in Language Usage*. New York: Cambridge University Press.

調査資料<sup>9</sup>

<p>&lt;高校生対象アンケート&gt;</p> <p>敬語使用実態調査</p> <p>以下の設問の状況において、<u>ふだん自分が使うと思われる表現に一番近いもの</u>を選択肢から選んでください。(このアンケートはどのような表現が実際に使われているかを調査するためのものです。<u>正しいと思うものではなく自分が普段使っていると思う表現</u>を選んでください)</p> <p>1)自分が『親しい友人 A』に向かって、『共通の友人 B』について話す 「B なら昼休みに、教室に( )」</p> <p>2)自分が『親しい友人 A』に向かって、『共通の先輩 B(例：同じ部活の先輩)』について話す 「B 先輩なら昼休みに、教室に( )」</p> <p>3)自分が『親しい友人 A』に向かって、『教師 B』について話す 「B 先生なら昼休みに、教室に( )」</p> <p>4)自分が『先輩 A』に向かって、『友人 B』について話す 「B なら昼休みに、教室に( )」</p> <p>5)自分(1 年生)が『先輩 A(2 年生)』に向かって、『先輩 B(3 年生)』について話す 「B 先輩なら昼休みに、教室に( )」</p> <p>6)自分(1 年生)が『先輩 A(3 年生)』に向かって、『先輩 B(2 年生)』について話す 「B 先輩なら昼休みに、教室に( )」</p> <p>7)自分が『先輩 A』に向かって、『教師 B』について話す 「B 先生なら昼休みに、教室に( )」</p> <p>8)自分が『教師 A』に向かって、『友人 B』について話す 「B なら昼休みに、教室に( )」</p> <p>9)自分が『教師 A』に向かって、『先輩 B』について話す 「B 先輩なら昼休みに、教室に( )」</p> <p>10)自分が『教師 A』に向かって、『教師 B』について話す 「B 先生なら昼休みに、教室に( )」</p> <p>11)自分が『親しい友人 A』に向かって、『共通の友人 B』について話す 「B なら昼休み、教室で勉強( )」</p> <p>12)自分が『親しい友人 A』に向かって、『共通の先輩 B(例：同じ部活の先輩)』について話す 「B 先輩なら昼休み、教室で勉強( )」</p> <p>13)自分が『親しい友人 A』に向かって、『教師 B』について話す 「B 先生なら昼休み、職員室でテストの採点を( )」</p> <p>14)自分が『先輩 A』に向かって、『友人 B』について話す 「B なら昼休み、教室で勉強( )」</p> <p>15)自分(1 年生)が『先輩 A(2 年生)』に向かって、『先輩 B(3 年生)』について話す 「B 先輩なら昼休み、教室で勉強( )」</p>
--

<sup>9</sup> アンケートは、ある項目の回答が他の項目の回答に影響を与えないよう、質問文の順番をランダムに配置したものを 3 パターン用意し、実施した。本稿に掲載したものは質問文の順番を変更する前のもの。なお、大学生アンケートは高校生アンケートに比べ、聞き手・話題の人物の呼称と、所与の会話文が不自然にならないように多少変更を加えたものにすぎないので、紙幅の都合上、高校生アンケートを代表して掲載するにとどめる。

16)自分(1年生)が『先輩 A(3年生)』に向かって、『先輩 B(2年生)』について話す  
 「B先輩なら昼休み、教室で勉強( )」

17)自分が『先輩 A』に向かって、『教師 B』について話す  
 「B先生なら昼休み、職員室でテストの採点を( )」

18)自分が『教師 A』に向かって、『友人 B』について話す 「Bなら昼休み、教室で勉強( )」

19)自分が『教師 A』に向かって、『先輩 B』について話す 「B先輩なら昼休み、教室で勉強( )」

20)自分が『教師 A』に向かって、『教師 B』について話す  
 「B先生なら昼休み、職員室でテストの採点を( )」

<選択肢>

1 してたよ	2 しましたよ	3 されてたよ
4 されましたよ	5 なさってたよ	6 なさってましたよ

設問は以上で終わりです。最後に、設問に答えるにあたって疑問に思ったことや、答えづらかった箇所がありましたら、以下の空白に、できれば理由も添えてお書きください。

<フェイスシート> 敬語使用実態調査アンケート

以下の設問にお答えください。

(答えにくい、もしくは答えたくない設問がありましたら無回答でもけっこうです)

※本アンケートに関して、その使用用途は敬語使用実態調査にのみ使用され、その他の用途で使用されることはありません。また、このアンケート用紙を実際に拝見する者は本アンケート実施者である一人に限定され、一般に公開される際は集計結果という形でのみになります。その点をご了承いただいたうえでアンケートにご回答ください。

1)あなたの性別に○をつけてください 1, 男 2, 女

2)あなたの年齢をお答えください

3)普段、敬語を意識的に使う場面はありますか？

1, けっこうある 2, たまにある 3, あまりない 4, わからない

→ 1 または 2 と回答した方はどういった方と話すときに敬語を使いますか？  
 またどういった場面で話すときに敬語を使いますか？

4)これまで、人に敬語の使い方や言葉遣いに関して注意・指導されたことはありますか？

1, ある 2, ない

→ 1 と回答した方はどういった状況でどういった関係の方に注意されましたか？

5)逆に、人に敬語の使い方や言葉遣いに関して注意・指導したことはありますか？

1, ある 2, ない

→ 1 と回答した方はどういった状況でどういった関係の方に注意しましたか？

6)敬語(もっとひろく言葉遣い)に関して、普段何か感じるものがあればお書きください

以上でアンケートは終了です。最後に、アンケートに回答する上で答えにくかったところや、疑問に思った点などありましたらお答えください